

論 文

スペイン語教科書の諸問題

高 橋 節 子

Ⅰ. 序

大学の第2語学としてのスペイン語教育を考える際に、どのような教材を用いるかは一年間の授業の成果を決定するほどの大きな要因となる。ここでは筆者が過去数年間にわたって使用してきた教材 Zarabanda を中心に、それと目的を異にする2種類の教材を対比させて、今後の教科書のあり方を探ってみたい。

Ⅱ. Zarabandaについて

Zarabanda は、B B C 放送がスペイン語の初心者向けに1971年から1972年にかけて放映した語学用のテレビ番組である。25回のプログラムから成り、1回の放送は25分である。Zarabanda の目的は「スペインを旅行した際に最も役に立つ簡単なスペイン語を学び、標準口語スペイン語を理解できるよう」になることとされている。

1. 内 容

Zarabanda の大きな特徴は、プログラム全体がひとつのまとまったストーリーを構成している点にある。しかも物語の内容自体もおもしろく、成人の学習者の鑑賞に充分耐え得るものとなっている。実際に俳優が演じており、

衣装や舞台装置、ロケ、オープニングやエンディングの音楽、等、ちょっとした映画を観るような趣がある。

物語は、スペイン北部の小さな村 Piquera から一人の青年が地方都市 Segovia に出発するところからはじまる。前半部分は Segovia を舞台に、主人公 Ramiro が腕のいい自動車修理工として働く一方で、恋もし、別れも経験し、またよき友を得る、といういわば青春物語である。後半は舞台を Madrid に移して、南米の小国の前大統領を誘拐して身代金を奪おうとする犯罪に主人公が巻き込まれていく、という意外な展開をみせる。

このように、よくありがちな旅行者や留学生が主人公で当地を訪れるという形式をとらず、寒村出身者という文化的社会的異邦人を使う事で同じ効果をあげながら、しかも旅行者につきものの平板さ、ワンパターン化を脱却しているところが Zarabanda の場面設定の巧妙なところである。

2. 視聴覚教材について

テレビのプログラムはそのまま25巻のビデオとなって販売されている。約20年も前の映像であるため、情景、車、バス、ファッション等に古臭い点があるのは否めない。しかし、20年前には教育器材としては音声テープが主で、ビデオはまだ活用されてはいなかった。ビデオが急速に広まり、教育器材としての地位を確立したのはここ10年ほどのことである。したがって、Zarabanda もその活躍する場が与えられたのはそれほど昔のことではないということになる。

ここでは語学教育にビデオを用いる利点を簡単に指摘しておこう。

まず上げられるのは、ビデオによって「場面」の設定が可能になることである。発話行為は必ずなんらかの「場面」ともない、場面を取り除いた発話は意味をなさない。また、発話行為は場面に依拠して行なわれる。言語表現は原則的にそれ単独で機能を果たしう程、伝達内容的に自立しているわけではない。聞き手は指示対象として場面に関する知識を利用・予測しつつ、言葉を聞いて理解している。また、話し手も、聞き手の場面・状況に関す

る情報を前提としながら、発話行為を行なっているのである。

また、心理学の観点からもビデオの有効性は確認されている。人間は視覚と聴覚の感覚系統が特に優勢であり（「視」が6割、「聴」が3割、あとの3感が1割程度）、この点からも視覚と聴覚とを同時に刺激するビデオの役割は大きい。思考の本質は「一括理解」、プロトタイプの理解を基礎としており、講義を聞いたり、読書をしたりの中での interaction の過程で、その理解を verbal なもの、ロジカルなものに移し換えていく。体験的な学習、特に映像的な情報はプロトタイプをつくらせやすいので重要な要素になりうる¹⁾。

さらに、ビデオによってコミュニケーションにつきもののノンバーバルな情報を得ることができる。通常の言語活動において、ノンバーバルな手段が伝達活動に寄与する役割は非常に大きいことが指摘されている。言語が伝達に占める割合は30-35%にすぎないという報告や、メッセージの7%が言語、38%が準言語（トーン、イントネーション、ピッチ、ストレスなど）、そして55%が顔の表情によって伝達されるという判断もある²⁾。その意味でノンバーバルな情報によるコミュニケーションは Zarabanda の前半のほうが効果をあげている。後半になると言語による情報の量が多くなるため、相対的な重要度は低くならざるをえない。また、ノンバーバルな情報を活用する事で、言語による以上の情報を伝える事が可能になるわけで、Zarabanda が単純な構文や単語を用いながら、内容のあるストーリーを展開できるのは、声の抑揚、ゼスチャー、顔つき等の言語外の情報でことばの意味を類推する手がかりを与えているからに他ならない。

このように、ビデオによる教材は、その利点が正しく活かされれば特に初級段階において非常な効果を発揮することは間違いない。

Zarabanda のテキストには英語で詳しいト書がついていて、テープのみで学習する場合にビデオがなくてもだいたいの状況が分かるようになっている。最初のシーンは次のように描かれる。

Inside Petra's house in Piquera de San Esteban. Petra is grimly ironing

things for Ramiro, her son, whilst he packs his suitcase. Ramiro comes to a halt in his packing.

Ramiro ¡Por favor, madre! Quiero un pijama.

Petra (hanging him a pair of pyjamas.) Un pijama.

(Ramiro hunts among the clothes)

Ramiro Quiero una toalla. (Petra hands him a towel)

Petra Una toalla. (Coldly) ¿Algo más?

Ramiro Sí, quiero algo más. Quiero una sonrisa. Quiero una sonrisa, madre. ¡Por favor!

Petra (Contemptuously, unfolding a fancy shirt) ¡Qué camisa!

Ramiro Una camisa moderna...

これは映画のシナリオの手法である。これを活用する事で学習者はその場の状況がわかり、しかも母国語で書かれているので、意味を類推する手掛りが与えられる事になる。また冷淡にとか、軽蔑したように、とかセリフに指示が与えられる。これはノンバーバルな情報をできるだけ文字化しようとした試みである。

後半にいくに従ってこうしたト書は少なくなる。これは言語による情報量がふえるに従って、ト書によるノンバーバルな情報の重要性がしだいに減少した事を意味している。

日本におけるスペイン語の教材で、こうしたト書がもちいられているケースはあまりない。あってもスペイン語で書かれていたり、内容理解の手助けとしての役割を意識したものではない。特に初級の段階でのト書は、学習者の母国語で書かれていて、テキストの内容を類推する手がかりになっていれば理想的である。ビデオ作成が困難である以上、初期の外国語教育におけるシナリオによる教材の有効性がもっと認識されてよいと思う。

スペイン語の視聴覚教材の一つに *Vida y diálogos de España* がある。これは、テープに録音された会話の状況が一つ一つのコマ絵（あるいはスライド）になっているものである。大事なものは一つのセンテンスに必ず一つの

絵が対応するようになっていることと、会話の内容ができるだけ類推できるような絵の工夫がされていることである。例えば、疑問文に対応する絵にはクエスチョンマークがつけられている、否定文にはバツテンマークが、場所を尋ねる時には小さな四角の上にクエスチョンマークがつけられ、「～へ行く」という時には矢印がついている。

また、La france en direct 1 も同様で、一つの絵に一つの文が対応し、絵を見ただけで文の内容がある程度分かるように様々な工夫がこらされている。これに対して Español en directo 1 は複数のセンテンスに一つの絵しか対応していないので、絵が単なる挿絵の効果しかあげていないことに注意すべきである。同じ事は福井千鶴（1985）にもいえる。これも、一つの絵に複数のセンテンスが対応し、また文の内容を類推させるような工夫がされていないので、挿絵数が多いというレベルに留まっている。

教材に絵を用いる事はビデオに較べると、文の内容を自由に視覚化できるという利点がある。その反面、動きに欠けるので学習者の興味を引きつける魅力に乏しく、また、一つ一つの文にポーズをおいて録音されるため、ディスコースとしてのまとまりに欠け、自然な発話が得られないという欠点がある。

3. テキストとしての Zarabanda の特徴

テキストの構成は、イントロダクションで簡単な発音とアクセント規則の説明があり、本文では各課ごとのビデオのトランスクリプト、語句の説明、文法の説明、練習問題、そして最後の Comprehension scene では簡単なあら筋といくつかのキーセンテンスが与えられる。また、巻末には練習問題の答え、および800語程度のボキャブラリーがついている。

(1) シラバス構成

各課は特定の目標が設定され、それにあわせた必要最小限の文法と、表現、語彙が導入される。Zarabanda の目的は「スペインを旅行したとき、及び

通常の口語スペイン語を理解するのに最も有用な単純なことば」を学ぶことだとされているように、各課の目標も伝達機能を重視したものになっている。カッコの中にはその課で学ぶ主な文法項目を記しておく。

1 課：How to say what you want, or don't want. (名詞の性, 不定冠詞, quiero, quiere, usted, 疑問文, 否定文, 形容詞)

2 課：How to introduce yourself and ask about others (定冠詞, 前置詞 a, de, soy (de), es (de), 男性形と女性形が対になる名詞)

3 課：How to ask where something is (está, están, hay, voy, vamos, 形容詞の性数変化)

4 課：How to say what you want or have to do (不定詞, tengo, tiene, tener que, 所有形容詞 mi, su)

5 課：Revision

6 課：How to talk about the time (60までの数字, -ar 動詞の規則活用)

7 課：How to say what you are going to do (指示詞, ir a, ser と estar の全活用)

8 課：How to express like and dislike (間接補語 me, le, gustar, 所有形容詞)

9 課：Shoppoing and ordering (quisiera, 直接補語 lo(s), la(s), 人間の目的語につく a)

10課：Revision (-er 動詞, -ir 動詞の規則活用)

11課：How to ask permission (語根母音変化動詞)

12課：How to ask a favour (現在分詞, 進行表現, tú の肯定命令と usted に対する命令)

13課：Asking how to get somewhere (一般人称を示す se, 所有形容詞の強勢形)

14課：How to express an opinion (再帰代名詞, 再帰動詞)

15課：Ordering a meal(主語人称代名詞,前置詞のあとにくる代名詞のまとめ)

16課：How to talk about the future (未来形, 曜日と月の言い方, 数60以

上)

17課: How to talk about the past: recent action, *one* (現在完了, 過去分詞, 補語人称代名詞のまとめ, 主語と動詞の語順)

18課: How to talk about the past: recent action, *two* (不規則な過去分詞, 天候の表現)

19課: How to talk about the past: how long ago? (時の経過を表す *hacer*, *acabar de*)

20課: Revision (現在形の不規則動詞のまとめ)

21課: How to talk about the past: descriptions (不完了過去)

22課: How to talk about the past: specific moments in time *one* (完了過去の規則形, 序数)

23課: How to talk about the past: specific moments in time *two* (完了過去の不規則形)

24課・25課: Revision

こうしてみると, 前半と後半ではシラバス構成に差があることが分かる。前半(1課~15課)は言語の伝達機能に焦点をあわせているが, 後半(16課~)は文法機能に焦点が当てられている。ただし, 前半部分でも一見伝達機能中心にみえて, 実は文法機能をベースにした構成をしている点は注意する必要がある。

Zarabanda のすぐれている点は, 伝達機能と文法機能がうまく連動したシラバス構成であり, 基礎的なものから高度なものへと自然に移行しながら, しかも首尾一貫した学習者の興味を引くようなストーリーを構成している点にあるといえよう。

Zarabanda の前半は言語の文法機能よりも伝達機能に重点がおかれているために, 文法事項を一度にパラディグマチックに提示する, という方式を採用していない。例えば動詞の扱いにおいても, 活用形を一人称単数から三人称複数まで全部一度に導入するのではなく, 小出しにしてある程度まとまった段階でまとめとして全部提示する, という方式をとっている。人称代名詞,

所有形容詞，補語人称代名詞等も同様である。それに対して，Zarabanda の後半になると，文法の体系性をより重んじる立場から，動詞の活用形はすべてパラディグマチックに揭示されている。

(2) 理解（受信）能力と発表（発信）能力

Zarabanda の大きな特徴の一つに，Comprehension Scene が設けられている事が挙げられる。各課は前半と後半に分かれ，前半はトランスクリプトがついているが，後半の Comprehension Scene はいくつかのキーセンテンスと簡単な粗筋だけで，学習者がビデオをみてほしいの筋をつかむことを主眼としている。自分が知っている単語とノンバーバルな情報をフルに活かしてほしいの意味を推測する。この時ノンバーバルな情報提供にはビデオが威力を発揮している。

Comprehension scene についてはイントロダクションで次のようなコメントがある。

“it is no use being able to ask a question in Spanish if you can't understand the answer. When you talk to Spaniards they will use language more complex than you have learnt. You have to try and get used to following the gist of what is said. To help you develop this skill there is a special 'comprehension' scene in each programme, in which we want you simply to follow the general sense.”

つまり，学習者は話せる以上に多くのことを理解しなければならない。理解能力と発表能力とを区別し，理解能力を伸ばすための訓練をする必要がある。次に述べる España Viva にもこうした考え方が反映されているが，日本で作られている教科書をみると，こうした二つの能力の相違を意識して書かれたものはほとんど見当たらない。

受信能力と発信能力を区別しない教科書では，書かれている事はすべて一様に理解され，再現されなければならないが，両者を区別する教科書では，逐一分からなくてもほしいの意味が聞いて，あるいは読んで把握できる部

分と、はっきり理解し自ら発信できなければならない部分とに分かれている。Zarabanda のように受信能力を伸ばすための特別なセクションを設ける場合と、España Viva のように、本文及び練習問題のなかに組入れてある場合とがある。いずれの場合にせよ、映像や絵、写真などの視覚に訴えて、学習者が推理する際の手がかりを与える工夫が不可欠となる。

また、この Comprehension scene の部分は、学習者の興味やレベル、時間数に従って、教師が自由に利用する事ができる。例えば、時間的に余裕があるとき、学習者のレベルや要求が高い時、あるいは文法項目を早く導入したい時は、Comprehension scene の一部をトランスクリプトし、通常のテキストとして授業に取入れる事もできる。Comprehension scene では先の課で学ぶ事項が挿入され、文法事項も本文よりも高度なものになっているからである。このように時間配分や学習者のレベルに従って、教師の自由裁量の幅が広いのも Zarabanda の特徴である。もっともこれは視聴覚教材一般にいえることであり、視聴覚教材を使いこなすには、最終的にはそれを使う人のオリジナリティがものをいうといわれている。

(3) スパイラル方式

Zarabanda においては、新出事項の提示が一回きりで終るのではなく、すこしづつ程度をかえて順次段階的に提示される方式が取られている。スパイラル、ないしはサイクリカルな学習法と呼ばれている方式である。これについて、フィノキアーロ、及び米山 / 佐野は次のように述べている。

「F-N アプローチでは、同じ一つの社会文化的テーマや文法カテゴリー、言語機能が、つねに論理的一貫性を保ちながら、いくつもの学習レベルで継続的に徐々に深められていく。以前に勉強した教材が今一度思い出され、復習され、新しい学習の中に同化されていく。」³⁾

「重要な言語事項は、文法項目であれ語彙項目であれ、教材の中に、計画的、定期的に関わり合う場面、形式などを変えて用いる必要があります。こうすることによって、その項目が一層確実に習得できるようになります。言

いかえれば、特定の言語項目を一度に集中的にそして1回かぎり提示する直線型の教材編成ではなくて、同じ言語項目をコースの中に間隔をおいて何度も扱い、次第にその項目の理解が深まり運用に熟達するように編成された、螺旋型あるいは循環型の教材が望まれます。」⁴⁾

伝達機能におけるスパイラル方式の例を上げれば、1課で扱われた How to say what you want が、4課では How to say what you want to do という形へと発展している。場所に関する質問においても、3課では How to ask where something is、13課では Asking how to get somewhere へと展開していく。9課の Shopping and ordering、15課の Ordering a meal も同じである。

文法機能をスパイラル方式で提示していくやり方は全編を通じて現れる。たとえば *querer* はまず、1課で1人称 (*quiero*) 3人称 (*quiere*) が導入され、4課で不定詞を従える用法、9課で婉曲な言い方としての *quisiera* が、11課で *querer* のすべての活用形 (現在形)、12課で依頼の表現としての *querer* が導入されるといった具合である。

動詞の人称形もスパイラル方式で導入される。1課と2課で1人称と3人称、3課で1人称複数が加わり、4課で3人称複数、5課の復習を経て、6課で2人称単数が登場し、ここで初めてすべての人称形が揃うことになる。こうした導入の仕方は、学習者の負担を軽くするだけでなく、各人称間の関係や特徴をつかむためにも有効である。

(4) ボキャブラリー

Zarabanda のテキストの巻末には800語程度のボキャブラリー一覧表がついている。スペイン語では、使用頻度上位1000語で文章の81%以上を占めるというデータもあり⁵⁾、800語という数字は初級段階では充分であろう。初級段階では、辞書を使って単語をひくことよりも、頻度の高い語の意味は初めから提示し、記憶した方が効果的である。頻度の高い上位1000語で81%以上を占めるが、次の1000を足しても全体の約86%にしかない⁵⁾。同

じ努力でも効果は通減していく訳である。頻度の高い厳選された基礎語彙をまず覚えてから、次に辞書をひきながら次第に語彙を豊富にしてい、というステップが望まれるのはこのためである。

日本の第二語学用の教科書をみると、巻末に動詞の活用表の一覧はのっているが、単語の一覧表がついているものは少ない⁶⁾、文法と並んで語彙も語学教育の重要な柱であることに鑑みて、語彙教育の重要性がもっと認識されてしかるべきだと思われる。

5. Zarabanda における教材の工夫

Zarabanda は、ストーリーの流れの中で、実に巧妙で自然な形で基本的な例文を挿入している。その代表例を一つ上げておこう。よく教科書に現れる「あなたは一人ですか」「私は一人です」という類の文は、次のようなシチュエーションの中で現れる。

2課で、トラックの運転手が左側を走ってきた対向車に向って、*¿Es usted inglés? ¡Derecha! ¡Anima!! ¡Derecha!* と叫ぶ場面がある。これは車道が右側のスペインに対して、イギリスが左側通行の点に着目した発想である。

5課でも同様の表現が現れる。ガールフレンドの Maribel を機械工の Ramiro に取られそうになった Carlos が、*No quiero competir con un mecánico. Tengo mi dignidad.* (機械工なんかとは争いたくないね。ぼくにだってプライドがある。)といったところ、Maribel に *Una reacción muy española* (まったくスペイン人的な態度ね) とからかわれ、*Lo siento. Soy español* (あいにくとぼくはスペイン人なんでね) と言返している。

このようにステレオタイプ化した月並な表現でも、Zarabanda のストーリーテラーとしての力量がかかると、まったく予想外の場面で登場し、生き生きとした意味合いを付与されることになる。

6. 練習問題

各課には練習問題がついているが、ほとんどがパターンプラクティスの域

を出ず、テキストの独創性に比べて見劣りがする。ただ、テキストに含まれる語彙がかなりあるので、本文についての質問をしたり、西作文の課題をだしたり、ビデオの聞取りをしたり、学習者のレベルによっては音声を消してセリフをいわせたり、または実際に演じてみたり、練習の応用は教師の工夫によっていろいろに展開できる。

7. Zarabanda の問題点

文法機能編成上の弱点はやはり時制である。扱っているのは、直說法現在、未来、現在完了、不完了過去、完了過去、の五つだけであり、過去未来、未来完了、過去完了や接続法のすべての時制（現在、過去、現在完了、過去完了）は扱っていない。少なくとも婉曲用法としての直說法過去未来（podría～, me gustaría～, querría～等）及び、接続法現在の簡単な用法はたとえ初級段階であっても扱うべきであろう。

伝達機能シラバスの選択に関して疑問に思うのは、13課の Asking how to get somewhere, 15課の Ordering a meal, 19課の How to talk about the past : how long ago? の三つである。9 課と15課ははっきりと旅行者を想定したシラバスで、一般的な学習者にとってはもっと必要なシラバスがあるはずである。19課で、時の経過を示す hace～que～ をわざわざ一つの独立したシラバスとして取上げたのは、学習者の母国語が英語だからである。英語では時の経過や継続は現在完了で現されるが、スペイン語では現在完了を用いず、動詞 hacer で表現する。従って、それ以外の母語を持つ学習者に対しては別のシラバスを用意する必要があるだろう。

また、動詞の活用において、2人称複数形を割愛するという大胆な試みをしている。これは中南米の諸地域では vosotros が用いられないことによるものであろうが、スペインでは、初対面でも tú, vosotros が多用される事を考えると、最後まで2人称複数形を導入しない Zarabanda の方針には疑問が残る。

Zarabanda はビデオ教材として、ストーリーの巧みさ、演技や演出のう

まさ、自然な会話運び、言語の形式面と伝達内容面とがうまく連動したシラバス構成等、非常に優れた面をもっているが、練習問題その他を含めたテキスト全体の構成は必ずしも満足のいくものではない。同じビデオ教材でも、たとえば Switch on は、最初にキーワード、目標とする表現、及び文法機能の preparation exercises があり、次にビデオをみてから Comprehension exercises、次にビデオのトランスクリプト、さらに Practice exercises で理解をチェックし、オーディオテープでヒアリングの練習をするという順序になっている。このように、学習の最初に単語や文法の予備知識を与え、これから学ぶ項目をはっきりと知らせるのは重要なポイントである。次にビデオをみた段階で（文字はまだ見せない）、ストーリー展開の上で鍵となる部分がどの程度理解できたかチェックする（その際、先に質問事項を頭にいれて、ポイントになる部分に特に注意を集中させると効果的である）。ここでは理解能力のチェックが主なので、幾つかの選択肢の中から答えを選ぶような形式が適当である。次にトランスクリプトを見せ、発音練習等に入り、ここで初めて自ら発表する能力が問われる事になる。

Zarabanda は自らのもつビデオ教材としての可能性を認識し、十分に生かし切れているとは言い難い。結局、Zarabanda は素材としては非常にすぐれたものをもっているが、加工ということに関しては、まだまだ使い手の創意工夫に委ねられている部分が大いといえる。

Ⅲ. España Viva について

言語の文法機能と伝達機能の双方の観点からシラバスが複合的に設定されている教材として、Zarabanda を取上げたが、主に伝達機能の点からシラバスが構成されている教材として、1987年に同じく B B C から発表された España Viva を取上げてみよう。

その目的は「スペイン語のみならず、それを話す人々も知る事」であり、対象は「スペイン語についてほとんど、あるいはまったく知らない人」で、

「時間に余裕のない人」とされている。各課は「一晩で理解でき学べる範囲に止め」、プログラム終了時には、「道を尋ねたり、買物をしたり、食事を注文する事ができるようになり、仕事や天候、自分自身についての簡単な会話ができるようになる」と述べられている。

1. 構成

España Viva には Zarabanda のようなストーリーがあるわけではない。テキストではまず、SPANISH LIVE というコーナーで、インタビュアーが通行人等に質問するダイアログ形式のテキストがあり（そこでは新出語彙に訳が付けられている）、KEY WORDS で重要な語彙と表現のまとめがある。次に簡単な文法と発音の説明があり、工夫をこらされたかなりの量の練習問題が続くという構成になっている。全部で15課の構成で、Zarabanda に較べるとかなり短くなっている。

15課のタイトルはすべて伝達機能や会話のトピックに焦点があてられていて、文法機能に焦点が当てられている章はない。括弧の中はその章で扱う主な文法項目である。

- 1 課 ¿Cómo te llamas? Saying hello and goodbye, Saying who you are, Where you're from (tú, usted, 主語の省略, inglés, inglesa, ser (soy eres es))
- 2 課 ¡Mucho gusto! Buying a drink, Meeting people (不定冠詞, 定冠詞)
- 3 課 De compras (名詞の複数, tengo, tienes, tiene)
- 4 課 ¿Dónde? (está, están, vivo, vives, vive)
- 5 課 De vacaciones (現在分詞, me·te·le gusta, 否定, 形容詞の性数一致, estoy, estás, está)
- 6 課 En coche (hay)
- 7 課 El tiempo es oro (不定詞, 規則動詞(単数形のみ))
- 8 課 ¡Que aproveche! (-ísimo, 語根母音 e が ie に変化する動詞(単数のみ))

- 9 課 De tiendas (目的語代名詞lo, la, los, las, 指示詞 este, esta)
- 10課 Tiempo libre (ir a, ir (voy, vas, va), hacer (hago, haces, hace))
- 11課 ¡Buen viaje!
- 12課 Cinco estrellas (1 人称複数及び 3 人称複数の動詞の活用, 一般人称に用いられる se)
- 13課 Sol y sombra (天候の表現, 比較の言い方, 2 人称複数の活用)
- 14課 Viajes y vacaciones (ir, estarの完了過去(単数のみ))
- 15課 Haciendo turismo (復習)

文法機能の習得そのものが目的ではないので、文法機能に関しては非常にスリムな構成になっている。従って、本文中に現れる文法事項は、かなりのものが「決まり文句」としての扱いをうけることになる。そのいくつかは後の章で説明を受けるが、中には最後まで「決まり文句」の域をでないものもある。たとえば、1 課の *Cómo se llama, cómo te llamas, me llamo* は決まり文句として導入され、動詞の活用に関しては5 課で説明されるが、再帰動詞に関しては最後まで説明がない。ただし、巻末に簡単な文法の説明があるので、興味がある学習者は参照することができるようになっている。

また、インタビュー形式でプログラムが進行するので、人称は *yo, tú, usted* が中心となり、3 人称や複数後は回しになる。

時制は現在形が中心で、14課の文法の説明で、*estar* と *ir* の完了過去の単数人称 (*estuve, estuviste, estuvo, fui, fuiste, fue*) のみが現れるが、複数はなく、また規則活用の説明もなく、巻末にも現在形以外の時制に関する説明はない。また本文には *me gustó, te gustó* という形で *gustar* の過去形も現れるが、意味が書いてあるだけで、文法のコメントはない。過去形の扱いは「決まり文句」の域を出ず、学習者はこの時制に関して他の動詞に応用したりすることは期待されていない。

3. ¿Cómo se llama? (何という名前ですか)

スペイン語の教材をみると *Cómo se llama* をどの様に扱うかはかなり

興味深い視点となる。¿Cómo se llama? という表現はコミュニケーション重視の立場からいえば、当然かなり早い段階で導入されるべき項目となる。しかし、文法体系を重視する立場からは、これは再帰動詞を用いた表現であり、動詞の現在形と代名詞の項目を終了した後に導入されるべきものである。事実、España Viva をはじめ、コミュニケーション重視をうたった教科書の多くが第1課で Cómo se llama を扱い⁷⁾、文法中心のシラバス構成の教科書が再帰動詞を扱う章でこの表現を扱っているのは実に対照的である。

一方、Zarabanda の扱いをみると、Cómo se llama は再帰動詞を扱う14課で初めて出現している。Zarabanda は一見伝達機能を重視しているように見えながら、実は文法体系を基軸とし、それに伝達機能をからめるシラバス構成をしていることがこの点からも伺われる。

4. ボキャブラリー

España Viva の中には頻度数が低い語彙がかなり含まれている。その多くは食べものやショッピングに関するものである。また、値段や時間、時刻を示すための数字も頻繁に現れる。これは España Viva が、学習者がスペインを旅行した際に遭遇する基本的な事柄を想定しているからに他ならない。レストランやバーで食べ物や飲み物を注文し、道を尋ね、店で買物をし、ホテルに泊り、電車の切符を買い、車にガソリンを入れ、という場面設定をみれば明らかである。

従って、この教材は、実際にスペインを旅行しようとする学習者にとっては極めて有用なものになりうるが、それ以外の学習者にとっては無駄な部分の多い、しかも必要な部分の欠けている構成になっている、といわれてもしかたがない。

5. 練習問題

España Viva における練習問題は多彩で、分量も多い。Zarabanda で登場した置き換え練習の類はほとんどなく、その代わり、語彙に関する質問

(クロスワードパズル形式の問題、文字群の中から隠された単語を探し出す問題、等)、シチュエーションを与えて発話をうながす問題、理解能力を伸す問題(絵や写真等を利用して、未知の単語を含む文が問題に登場する)等、さまざまな形式の問題が与えられる。その他、数字の練習にはコインやお札、スーパーマーケットに貼ってある値段の張紙、レストランのメニュー、電車の時刻表、ホテルの伝票、地図を使うなど、単なる練習に終ることなく、常に現実の場面と密着した発話を想定している点は評価されてよいであろう。

Ⅳ. 日本におけるスペイン語の教科書

España Viva とは反対に、日本における第二語学としてのスペイン語の教科書は文法中心のシラバス構成になっている。いわゆる文法書が教科書の多くを占めていることにも、この傾向は端的に現れている。また、読本と称されるものもやはり文法中心の編成である。

こうした教科書は次のような特徴をもっている。

言語を学ぶためには文法構造を学ぶことが第一義とされ、学習目標となっている文型の例をできるだけ多くつくることに関心があるので、テキストのテキスト性が犠牲になったり⁸⁾、伝達内容の希薄な文や、面白みに欠ける文ができてしまう。

文法中心のシラバス編成であるから、まだ習っていない文法事項を含む言い回しは厳格に避けられる。

また、文法は体系的に配列され、paradigmatic にすべて提示される。従って、Zarabanda で現れたように1人称と3人称の活用形だけがまず導入されるとか、冠詞の単数だけがまず提示されるということはない。

対話があっても、誰がどんな場面で話しているかには関心がない。話し手は、AとかBというかたちで示されることもある⁹⁾。

規則的なものから不規則なものへという原則も厳守される。Zarabanda

のように第1課から *quiero* が導入されたり、まして *España Viva* のように *Cómo se llama* から入るということはない。

V. 終りに一今後望まれる教科書像一

ここまで、*Zarabanda*, *España Viva*, 日本の教科書、とそれぞれ言語教育の目的を異にする教科書を見てきた。後者二つはそれぞれ言語の伝達機能、文法機能に重点をおいて編集されているため、相補うはずの一方の機能を軽視する結果になっている点是否定できない。その点、*Zarabanda* は前半は伝達機能中心、後半は文法機能重視という複合的な構成を成している。ただし、伝達機能中心とはいっても、文法項目の提示には周到的な注意を払っている点は、*España Viva* とは異なっている。未習熟な文法機能を用いた表現を決まり文句として取り入れていく *España Viva* とは反対に、*Zarabanda* では決め文句として文法的説明を避けざるをえない文は極めて少ない。こうした *Zarabanda* の行き方は大学における第二語学を考える際の一つの指標になると思われる。

教科書は元来、それを使う学習者のレベル、年齢、興味、目的、さらに学習に割ける時間、使える設備等によって様々なものがあっていいはずである。しかし、日本で現に使われている教科書をみると、画一的な印象を否めない。大学の第二語学という性格からの制約はあるにしても、もっとバラエティがあってしかるべきであろう。

たとえば、今後望まれる教科書として、次のような特徴をあげることができだろう。

1. 文法機能と伝達機能が統合されたシラバスの作成
2. 一貫したストーリーをもった教材
3. シナリオ形式の活用
4. スパイラル方式による提示
5. 語彙教育に対する配慮

6. 発表能力と理解能力の区別
7. 聴覚的刺激, 視覚的刺激を活用する。
8. 練習問題に工夫をこらす。
9. クラスサイズ, 時間数, 学習者のレベルに合わせて, 弾力的に運用できる。
10. 自分で文法規則を発見できるような工夫

最近の教科書は易しい, 簡単な, 短いといった説明がよくみられる。これは文法事項を減らし, 例外的な事項は割愛し, しかも教科書全体の量を減らす事を目的としている。従って, 従来のものと較べて, 薄くなり, 設けられる章の数も少なくなっている。これは学習者に対する負担の軽減を図るため, と説明されている。また, 第二外国語に当てられる時間的制約も考慮されている。

しかし, クラッシュェン¹⁰⁾によると, 言語学習において入力には十分に与えるのがよく, 学習者は自分の力に応じてフィルターをかけ表現するのであり, 逆説的ではあるが, 話す力をつけるには, 充分な量のリーディングとヒアリングを与えるのがよい, ということになる。この考えからすると, 「分量を減らし」「短く」という最近の教科書の傾向は, 文法に関してはいいが, *lectura* に関してはむしろ誤りであるといえる。また, 発表能力と理解能力を区別する考えからすれば, 教科書に書かれてある事柄すべてを完全に理解する必要がなくなり, 受信能力を伸すためには, やはり充分な量の入力が不可欠ということになる。

語彙に対する配慮も欠かせない。基礎的な語彙能力は, 言語外の情報とあいまって, 未知の単語や文法構造をある程度カバーすることもできる。こうした推理や直感を大事にすることは, 先に述べた理解能力の開発に関しても非常に重要である。

練習問題もテキストとあいまって学習効果をあげるために, もっと研究されていい。日本の教科書に必ずといっていいほど登場する和文西訳や西文和訳, あるいは書換練習等は文法の定着には役立つかもしれないが, 伝達能力の向上には別の形式を考える必要がある。

現在は、ことばを学ぶべき対象としてみた時代から使用すべき体系とみる時代への転換期であり、第二外国語としてのスペイン語教育もその趨勢を避けては通れない。ことばは伝達的手段であり、学習者は伝達能力を発展させなければならない。

しかし、現実には時間的制約やクラスサイズの問題等、学習者は必ずしも理想的な環境におかれている訳ではない。そのため、テキストは文法のもつ体系性、整合性を中心にすえ、無駄のないものにすることがある。文法体系を無視した形で選択された機能項目一覧は、断片的な知識に留り、応用として新たな文を生成する能力を付与することはできない。また、成人学習者の知的な疑問を「決まり文句」という形で押え込むことも効果的ではない。文法機能と伝達機能の統合といっても、あくまでも文法の体系性を中心に伝達機能との組織化をはかるべきであり、その逆ではないことは銘記する必要がある¹¹⁾。

注)

- 1) AVEC Annual Report no.1 1985:85
- 2) von Raffler-Engel, W, 1981:237
- 3) Finocchiaro, M, and Brumfit, C, 1987:46
- 4) 米山朝二／佐野正之 1983:106
- 5) 高橋覚二 1987:1
- 6) 巻末に語彙の一覧表がのっている教科書としては、石崎優子／Rey, Felisa (1990), 上田博人 (1991), Rubio, Carlos／秋山紀一 (1989) 等がある。
- 7) Sánchez et. al. (1982), Equipo Pragma (1984), Equipo AVANCE (1986)
- 8) Halliday and Hassan 1991:115-116 に次のようなコメントがある。

He got up on the buffalo (例5・2)

I have booked a seat

I have put it away in the cupboard

I have not eaten it.

彼はバッファローの背中で目をさました。

私は席を予約したところだ。

私はそれを食器棚にしまった。

私はそれをまだ食べていない。

・・・外国語を教えられたことがある人なら、例5・2の4つの文が外国語教科書からもってきたものだということを聞いても、べつに驚かないであろう。・・・例えば例5・2には明確な「発端・中間・終結」がない、事実、言語に関する非常に残念な誤解によって、言語教育に用いられる例文には連続性がなく、通常非常にメタテキスト的である。例5・2の文の一つにまとめるについては純粹に形式的な理由がある。つまり、ことばがこうした形で日常生活で使われる事はほとんどないというわけである。

- 9) 明確な場面設定と一貫したストーリーをもったものとしては Rubio/秋山, 1989がある。
- 10) Dennis, J. and 島岡丘 1986:12(脚注)
- 11) この点に関しては Brumfit, 1981, Johnson and Morrow (ed.): 45-46を参照

主な参考文献

- 朝倉剛 et al. (1985) 『AVEC Annual Report no.1』 東京外国語大学視聴覚教育センター
- Dennis, J. and 島岡丘 (1986) 『統合的英語教授法』 大修館書店
- Finocchiaro, M. and Brumfit, C. 織田稔/戸克憲訳 (1987) 『言語活動中心の英語教授法』 大修館書店
- Halliday, M. A. K. and Hassan, R. かんひろお訳 (1991) 『機能文法のすすめ』 大修館書店
- 伊藤健三, 島岡丘, 村田雄三郎 (1982) 『英語学と英語教育』 (英語学体系第12巻) 大修館書店
- 入谷敏夫 (1983) 『言語心理学のすすめ』 大修館書店
- Johnson, K. and Morrow, K. (ed.) 小笠原八重訳 (1981) 『コミュニケーション・アプローチと英語教育』 桐原書店
- 松畑一 (1982) 『生徒と共に歩む英語教育』 大修館書店
- von Raffler-Engel, W. (ed.) 本名信行他訳 (1981) 『ノンバーバル・コミュニケーション』 大修館書店
- 高橋寛二 (1987) 『口語スペイン語基本語彙』
- 米山朝二/佐野正之 (1983) 『新しい英語科教育法』 大修館書店
- Vargas, M. F. 石丸正訳 (1987) 『非言語コミュニケーション』 新潮社

引用した教材

- Ariza, Sperber, Fernández-Casalla and Hargraeves (1971) *Zarabanda*, BBC
- Capelle, J. (1969) *La france en direct 1*, Hachette
- Equipo AVANCE, (1986) *Antena 1*, SGEL
- Equipo pragma, (1984) *Para empezar A*, edi-6

高橋 節子

福井千鶴 (1985) 『スペイン語を話そう』 白水社

Menné, Saxon (1982) *Switch on*. Nelson Filmscan

Rojo, Rivenc y Ferrer (1968) *Vida y diálogos de España* (Primer grado), Librairie
Marcel Didier

Sánchez, Ríos y Domínguez (1974) *Español en directo*, Nivel 1A, SGEL

Sánchez, Ríos y Matilla (1982) *Entre nosotros* (nivel-I), SGEL

Utlej, Derek et al. (1987) *España Viva*, BBC

参考にした日本語の教材（最近のもののみ）

石崎優子／Rey, Felisa (1990) 『スペイン語世界への窓』 芸林書房

————— (1991) 『ようこそスペイン語の世界へーミニ会話と初級文法ー』

大学書林

上田博人 (1991) 『12課のスペイン語文法』 白水社

岡田辰夫 (1998) 『スペイン語ポコ・ア・ポコ (1)』 芸林書房

加藤, 木下他 (1991) 『スペイン語の散歩道』 大学書林

Sanmiguel, Ines／Rey, Felisa (1990) 『スペイン語の旅』 白水社

中山直次 (1989) 『その意味は・・・』 大学書林

————— (1989) 『応用すると・・・』 大学書林

丹羽／志賀／堀田 (1992) 『私たちのスペイン語』 大学書林

橋本一郎／酒井優子 (1988) 『スペイン語への招待』 白水社

福島教隆 (1989) 『新世代のスペイン語』 くろしお出版

宮本博司 (1988) 『楽しいスペイン語文法読本』 大学書林

Rubio, Carlos／秋山紀一 (1989) 『初めてのスペイン語』 岩波書店